

単元名 8 自分を見つめる 一文法への扉3 単語の性質を見つけよう

配当時間 2時間

単元の目標 (1) 「自立語」と「付属語」について、確認を通じ理解することができる。

活用とは何かについ

て、観察を通じ理解することができる。

(3) 単語を分類する方法について、文節内での位置や語形の変化、文の成分との関係に着目して考えようとする。

標準的な展開例

10210303_001

学 習 活 動	留 意 事 項 など
<p>1 単語が「自立語」と「付属語」に分けられること、及びそれぞれの性質について理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 教科書のリード文を読み、学習内容の確認と本時の目標を確認する。 ★単語の性質を見つけよう。 カードを組み合わせ、文を三つ作る。 <ul style="list-style-type: none"> カードは何回使ってもよい。 必要ならば、単語の形を変えてもよい。 黒板に書かれた文を、文節で区切る。 「自立語・付属語」(p. 247)を読んで、自立語と付属語について理解する。 単語の活用について知る。 挙げた自立語のカードのうち、「ない」につなげて否定の形を作ることができるものを探す。 「活用の有無」(p. 248)を読んで、「活用」を理解する 「練習問題」(p. 247～p. 248)に取り組む。 <p>2 品詞の分類や「体言」と「用言」について理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 第1時で用いた文を文節と単語に分ける。 分けた単語がそれぞれ自立語か、付属語か、また活用する単語か、活用しない単語かを考える。 分けた文節に注目し、その文節が文の中でどのような成分になっているか観察する。 「品詞分類表」(p. 249)を見て、単語が品詞に分かれていく基準(道筋)を確認する。 品詞には10種類あることを知り、特徴や働きを知る。 「体言と用言」(p. 250)を読んで、「体言」と「用言」について理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> カードは、全て1単語ずつになっていることを確認させる。 何人かの生徒に発表させる。 できるだけ用いる単語のバリエーションが多くなるように、10文程度を選ぶ。 ここで取り上げた文は、第3時でも観察の対象として用いることになるので、教師の側で記録しておきたい。 「ね」を入れてみると分かることを確認させる。 単独で文節を作る単語と、常に、他の単語に付く形で文節を作る単語があることを確認する。 薄緑色枠で示した、それぞれの性質について理解する。 自立語 <ul style="list-style-type: none"> ①文節の始めには、必ず自立語がくる。 ②一文節には自立語は一つしかない。 付属語 <ul style="list-style-type: none"> ①文節では自立語の後に付く。 ②文節に付属語が複数含まれていることがある。 <p>【評】自立語と付属語の性質について理解する活動を通して、「知識・技能」を評価する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「教科書のカード」(p. 229)のうち、自立語を全て挙げさせる。 「ない」以外に「た」や「ば」などを付けて命令するときのように言うかなどを考え、変わり方を見比べさせる。 活用の詳細については2年生で学習するのでここでは同じ単語でも後に付く言葉が変わると様々に形が変わる、ということまでを確認できればよい。 これまでに学習してきたことを基に、自立語の活用の有無を確認する。 付属語に関しても、活用の有無があることを理解させる。 <p>【評】活用の有無について理解する活動を通して、「知識・技能」を評価する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 文節の区切れ目と、単語の区切れ目はチョークの色を変える。 全ての単語について指摘させる必要はないが単語のバリエーションがある程度揃うようにしておきたい。 既習の事項の復習も兼ねつつ、表に合わせてじっくり説明していきたい。 例示されているものの以外に、どんな単語があるかを考えさせ、発表させることで、授業が活発になると予想される。 <p>【評】体言と用言について理解する活動を通して、「知識・技能」を評価する。</p>

【 備 考 】

表現に込められた書き手などの思いやものの見方を理解することは、大事なことである。表現の工夫とは、単

なる飾りではない。表現を工夫することによって、いっそう的確に描き出せたり、より効果的に伝わるようになったりした書き手や話し手の思いやものの見方などから、表現効果なども踏まえながら自分の考えをもてるようにさせたい。

また、「少年の日の思い出」は、ものの見方、感じ方、生き方の違いについて、じっくり考えさせたい作品である。これは道徳のC－（11）正義，公正・公平にあたり，これを機会に差別や偏見のないものの見方をしようとする気持ちを高めたい。